

『植物はなぜ動かないのか 弱くて強い植物のはなし』

ちくまプリマー新書

稲垣栄洋・著 筑摩書房



植物はなぜ動かないか、その問いに植物は「どうして人間はあんなに動かなければ生きていけないの？」と答えるだろうと書いてあります。なるほど、確かに・・・本書はこの例でも分かるように、徹底的に植物の立場で書かれています、だから書いてあることに説得力があり、おもわず納得してしまうのでしょう。

もちろん、生きるために栄養を他からとらなくてはならない動物に対し、植物は自分で栄養を作れるので、餌をとるために動く必要はないわけです。そうは言っても、「動かない」ではなく「動けない」ときもあります。敵に襲われても、環境が変化して住みにくくなっても、植物は一度根を張ったら、動物のように逃げたり移動したりすることはできません。では、どうするか。環境を変えることはできない植物は、自分を変えてしまうのです。害虫にやられないように毒物質で防

御する、寒さに対応して葉の構造を変える・・・

植物は競争型、ストレス耐性型、攪乱耐性型の3つに分けることができるそうです。競争に強くどんどん成長できるものとはかく、そうでない植物もあります。そういう草花たちは生きていくために、どうしたらよいか。一つは砂漠のような乾燥したところで生きる(サボテンなど)など、ほかのものがとても生きられそうもないストレスたっぷりの地で生きることを選ぶことです。もう一つは、しょっちゅう変化する環境に素早く対応する力を身につけることです。土地が耕されたり開発されたりすると、今までゆっくりと過ごしてきた植物は枯れてしまい、大きな木などは切り倒されてしまうでしょう。でも、次に耕されるまでに急いで開花して種をつけてしまう一年草などは、しっかり寿命を全うすることができるわけです。

私たちが雑草と呼んでいるものは、ほとんどがこの攪乱に強い型のようなのです。

いつも私たちが緑地作業で見たり触れたりしている草たちに、こんな知恵が隠されていたとは・・・。「あなたはどんな生き方をしているの？」小さな花を見たら、こんな会話をしてみたくくなりました。

(小川)